

2023年2月26日

2023年日本農業史学会研究報告会の開催案内(第2版)

日本農業史学会会員各位

前略 時下ますますご清祥のことと存じます。

先にお伝えしておりますように 2023年の日本農業史学会研究報告会は、法政大学において対面形式（シンポジウムのみ Zoom 中継あり）にて開催します。ついては下記にて当日のプログラムを案内します。久しぶりの対面での報告会です。多数の方の参加を期待しています。

敬具

記

日時：2023年3月20日(月) 9:30-18:00 (受付：9:00より)

午前：個別報告 (9:30-12:15)、午後：大会シンポジウム(13:30-17:10)、総会 (17:15-17:50)

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス (富士見ゲート G501, 502)

(添付の地図、もしくは下記の法政大学の地を参照下さい)

交通アクセス <https://www.hosei.ac.jp/ichigaya/access/>

キャンパスマップ <https://www.hosei.ac.jp/ichigaya/gaiyo/map/>

富士見ゲート <https://www.hosei.ac.jp/ichigaya/gaiyo/shisetsu/fujimigate/>

大会参加費：500円

*なお、今次大会は、例年の3月下旬ではなく、3月中旬の3月20日の開催となります。このため『農業史研究』第57号をその場でお渡しすることはできず、このため会場での会費徴収はしません。ただし、今回は会場使用料が発生しましたので、参加者からは上記のように大会参加費500円を頂きたいと思っております。領収書が必要な方は受付で申しつけ下さい。その場で領収書を発行します。

【I】個別報告 (9:30~12:15) (1報告あたり、40分 (報告+質疑))

会長挨拶 9:30-9:35

白木沢旭児 (北海道大学)

第1報告：9:35-10:15

「コミンテルン史観の克服のために」

報告者 玉真之介 (帝京大学経済学部)

座長 足立芳宏(京都大学)

第2報告：10:15-10:55

「戦後日本の農業協同組合による生活改善活動の展開 — 「生活基本構想」(1970年)までを中心に—」

報告者 安岡健一 (大阪大学)

座長 板垣貴志 (島根大学)

第3報告：10:55-11:35

「台湾産業組合はなぜ好成績を残したのか? : 台湾産業組合の特質」

報告者 坂根嘉弘 (広島修道大学)

座長 大瀧真俊 (名城大学)

第4報告：11:35-12:15

「明治大正期における徳島糖業の展開 ―岡田家の砂糖販売を中心に―」

報告者 藤田泰裕（京都大学大学院）

座長 湯澤規子（法政大学）

（昼休み：12:25-13:30）

【II】シンポジウム（13：30～17：10）

テーマ：「戦後沖縄農業・農村史研究の再検討」

座長・趣旨説明：13:30-13:35

小濱 武（沖縄国際大学）

第1報告：13:35-14:05

「農業・農村から再考する沖縄現代史―米国統治期の砂糖生産に関連して―」

報告者 鳥山 淳（琉球大学）

第2報告：14:05-14:35

「戦後沖縄における災害と救済―1950年代後半を中心に―」

報告者 小濱 武（沖縄国際大学）

第3報告：14:35-15:05

「米軍占領期沖縄からハワイへの農業実習生派遣事業

―ハワイにおける沖縄系移民のかかわりに着目して―」

報告者 安里陽子（岐阜工業高専）

第4報告：15:05-15:35

「豚たちの戦後史―激変する人と動物の関係と沖縄社会―」

報告者 比嘉理麻（沖縄国際大学）

（休憩）15:35-15:45

コメント1：15:45-16:00

坂井教郎（鹿児島大学）

コメント2：16:00-16:15

森亜紀子（同志社大学）

質疑応答16:15-17:10

（休憩）17:10-17:15

【III】総会（17：15～17：55）

【シンポジウム趣旨説明】

沖縄が日本本土へ「復帰」して、50年が過ぎた。沖縄島北部の辺野古への新基地建設をめぐる状況に象徴される、いわゆる「沖縄問題」が据え置かれ続ける状況と相まって、近年の戦後沖縄史研究の興隆は著しい。オーラルヒストリーの蓄積や沖縄県公文書館の設立以降の史資料環境の拡充にも支えられながら、多くの成果が生まれている（例えば『沖縄県史 各論編7 現代編』の刊行）。そのなかで「復帰」前のアメリカ統治下で経済社会がどのように再編されたのかという問いは、「復帰運動」への接続、冷戦体制下でのアメリカの文化政策の影響、同時代における日本本土の復興・高度成長の意義の問い直し、旧帝国圏の戦後史の

展開との関連などの論点を含みつつ、究極的にはそれが現在にどうつながるのかという視点から、その解明が一層求められている。

本シンポジウムでは、上述の問いを、農業・農村史の領域で検討する。むろん、この作業は、沖縄史研究に資するだけでない。第1に、農業・農村史研究において、戦後史についての研究蓄積は、戦後改革期のそれを除くと、未だに浅いように見える。比較的戦後史研究の豊富な蓄積のある沖縄は、戦後農業・農村史研究のあり方について考える事例となる。第2に、沖縄史研究の特徴の一つは、今日の沖縄をめぐる政治社会状況との緊張関係の中で生み出されてきたことである。農業・農村史研究が今日における政治的・社会的課題にどう対峙しうるのかを検討する上での基点となることができるだろう。第3に、沖縄戦とその後のアメリカ軍による暴力は、人びとの生存を絶えず危機にさらしてきた。農業は食の生産の営みであり、農村は人びとの生活を繋ぐ場である。沖縄を基点とすることで、生存という問題から農業・農村史を捉える上で新たな視角が提示されることも期待したい。

ただし、残念ながら、戦後沖縄農業・農村史研究は、それほど多くの蓄積があるわけではない。そこで、シンポジウムの共通テーマとしては、「戦後のアメリカ統治期を中心として、重層的に展開された沖縄統治のありようを、農業・農村に生きる人びとの視点から再検討する」という程度にとどめ、それぞれの論者が、重要だと考える論点を取り上げることとした。

なお、日本農業史学会では、2007年に「近代沖縄農業史の再検討」と題したシンポジウムを開催した。その際は「琉球処分」以降の戦前期を対象としていたが、今回は戦後期を対象としている。前回シンポジウム以降の沖縄史研究の進展は目覚ましく、それらの成果を踏まえての今回シンポジウムである。

日本農業史学会事務局

office@agrarian-history.sakura.ne.jp

郵便振替口座 00180-9-20117

(連絡先) 〒606-8502 :

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻

比較農史学分野気付

Tel : 075-753-6184(足立)、Fax 075-753-6191

法政大学市ヶ谷キャンパス案内

会場は「富士見ゲート」G501、G502 です。



主要駅からの交通アクセス

18	東京駅	JR中央線快速 約4分	御茶ノ水駅	JR総武線 約4分	飯田橋駅	徒歩 約10分	市ヶ谷キャンパス
20	新宿駅	JR総武線 約10分			市ヶ谷駅	徒歩 約10分	
20	池袋駅	地下鉄有楽町線 約10分			飯田橋駅	徒歩 約10分	
19	渋谷駅	地下鉄半蔵門線 約6分	永田町駅	地下鉄有楽町線 約3分	市ヶ谷駅	徒歩 約10分	
20	上野駅	JR山手線 約4分	秋葉原駅	JR総武線 約6分	飯田橋駅	徒歩 約10分	

内の数字は、総所要時間(乗り換え時間を除く)を表す。